

開催日：令和 5 年 9 月 1 日

会議名：令和 5 年第 6 回定例会（第 1 日 9 月 1 日）

○西本ちかこ それでは、お許しをいただきましたので、私からは、本市の学校給食のお米について 1 点質問させていただきたいと思います。

先日、兵庫県豊岡市が農薬や化学肥料を使わないオーガニックビレッジ宣言を出されました。

コウノトリを育む農法を普及させ、2027 年までに小中学校の学校給食で提供する米飯、年間 90 トンを全て無農薬にするとの新聞記事を拝見し、視察へ行かせていただきました。小中学校の学校給食にコウノトリを育む農法で作られた当初減農薬米を使うことになったのには、ある中学生がコウノトリ米を広げたい、もっと売ってほしいとの思いから、コンビニのおにぎりに使用してほしいとコンビニの店長へお願いに行き、その後、市長へ直談判に行ったことにより始まったそうです。

コウノトリも住める環境、コウノトリも住めるということは、コウノトリの餌になる多くの多生物が生きることができる環境をつくるということです。

コウノトリを復活させるために最も変わらなければいけなかったのが農業ということでした。コウノトリは戦後の経済成長に伴う生息環境の悪化により激減し、一時は絶滅しましたが、日本で最後まで生息した豊岡市で野生復帰プロジェクトに取り組んでこられました。現在、豊岡市で飼育されているコウノトリは 90 羽、全国の野外では 298 羽いるそうです。羽を広げると大きいもので 2 メートルあるコウノトリを実際目にしまして、本当に感動いたしました。豊岡市のように海拔ゼロの円山川と湿地帯に恵まれておらず難しいのかもしれませんが、茨木市は安威川があり、水が豊かですので、いつかコウノトリに飛んで来ていただきたい思いです。大阪では岸和田で見ることができるそうです。

コウノトリも住める環境、コウノトリを育む農法で育てられたお米、茨木市の子供にも食べてほしいと思いました。購入して帰りましたが、みずみずしくてふっくらとしており、とてもおいしいお米でした。今年、別のテーマですが、シティープロモーションで視察に行った鴻巣市では、農薬、化学肥料 50% 以下の特別栽培米のこうのとりの伝説米の推進を行われていました。

現在、所得が上がらない中、夫婦共働きのご家庭が多く、料理に時間をかけにくく、物価の高騰で食費にける家計費も抑えざるを得ず、季節の果物にも手が伸びないといった声を聞いております。

先日のニュースによりますと、厚生労働省がおとし行った所得格差の調査結果の発表によりますと、公的年金などを除いた年間世帯間の所得の格差は過去最大だった平成 26 年の調査に次ぐ水準だったとの報道があり、小学校での給食は子供たちにとって重要な役割を果たしていると考えます。

本市としましては、物価燃料の高騰により、来年3月まで小学校給食費を無償化に
していただき感謝いたすところです。

また、地産地消を進めていただいております。給食のホームページには小学校給食を作
る上で心がけていることとして、できるだけ加工品を使わず、だしもだし昆布、削り
ぶし、煮干しなどで取る。シチューに使うルーも小麦粉、サラダ油、バターで作る。
旬の味、季節感のある献立、季節の食材や行事にゆかりのある献立を取り入れている
と紹介されており、感謝をいたすところではありますが、豊岡市の学校給食のお米が
現在は85%の減農薬米、そして2027年には農薬や化学肥料を使用しない有機、
オーガニックの給食を全員に目指されているとのことで、茨木市でも取り組んでいた
だけないかとの思いから質問をさせていただきます。

1、本市の学校給食にどのようなお米が使われているのか。

米飯の頻度、米の年間使用量、茨木産の割合の過去3年間の実績、これから始まる
中学校全員給食における米飯の頻度と米の使用予定量について、お聞かせください。

小学校給食における米の購入の契約状況について、お聞かせください。

中学校全員給食における茨木市産の米の使用予定、使用内容についてお聞かせくだ
さい。

○小田教育総務部長 小学校給食における米の使用実績等でございますが、米の銘柄
は茨木産のヒノヒカリ、きぬむすめ、キヌヒカリ、その他の産地は令和2年度、令和
3年度は特別栽培の佐賀県産ヒノヒカリ、令和4年度は特別栽培の宮城県産ひとめぼ
れとなっております。

また、週に三、四回米飯の日があり、年間使用量と茨木産の割合は過去3年間で
令和2年度は約157.3トン、45.3%、令和3年度は約172.2トン、43.
8%、令和4年度は約175.5トン、84.9%となっております。

中学校給食における米飯の頻度は、月2回程度のパン食以外が米飯となる予定で、
米の年間使用予定量は約139トンを見込んでおります。

米の契約状況でございますが、地産地消の推進のため、主に茨木産の米を優先使用
しており、納入いただける事業者1者と随意契約を行っております。

また、量の不足を補うため、その他の産地の特別栽培米等を納入いただける事業者
1者を指名競争入札により選定し、契約を締結しております。

中学校給食における茨木産の米の使用につきましては、学校給食地産地消推進会議
の中で、月1回程度、茨木産の米を使用できないか農林課やJA茨木市等と協議を行
っているところでございます。

○西本ちかこ ご回答ありがとうございます。

豊岡市では年間90トンでしたが、本市は小学校で令和4年度175トン、そして

全員中学校給食では139トンが予定されており、合計320トン近く必要であるということが分かりました。

茨木産の米が令和3年度の43.8%から令和4年度は85%に増えている理由を教えてください。

地産地消に積極的に取り組んでいただき、茨木産の米の使用量が増えていることには本当に感謝をいたします。

では、減農薬の取組に関して、本市の見解を教えてください。

また、特別栽培の米とは、農産物が生産された地域で慣行的に行われている節減対象農薬及び化学肥料の使用状況に比べて農薬使用回数が50%以下、化学肥料の窒素分量が50%以下で栽培された農産物とのことですが、では、茨木産の米はどのような基準のものを使用されていますか。お願いします。

○小田教育総務部長 茨木産の米が増加した理由についてでございます。

物価高騰対策として、市からJA茨木市に給食用米を販売した農業者に対し、補助が行われたことや豊作であったこと、JA茨木市が農業者からの米の買取り価格を上げたこと等から、JA茨木市への出荷量が増加したためでございます。

減農薬の取組につきましては、重要であると認識しておりますが、量の確保や価格の課題もあることから、可能な範囲で取り組んでいるところでございます。

茨木産の米の基準についてでございますが、各農家が農薬取締法の農薬使用基準などを確保を遵守し、栽培をされております。

○西本ちかこ ご答弁ありがとうございました。

特別栽培米は農薬や化学肥料の使用を50%以下にしていますが、茨木産米は国の基準に遵守されているということで、茨木産のお米をぜひ農薬や化学肥料を使わない有機農業にかじを切っていただきたいと思うのですが、農薬や化学肥料を使わない有機農業、またオーガニックについての本市の取組について、お聞かせください。

○松本産業環境部長 有機農業に対する取組についてでございますが、化学合成農薬や化学肥料の使用量について、通常の半分以下で栽培される大阪エコ農産物や、農薬や化学肥料が軽減できる環境に優しいレンゲ米栽培については、普及推進を図っておりますが、化学的に合成された農薬や肥料を完全に使用しない有機農業につきましては、作物の安定的な栽培や収穫等が見込みにくいこともあり、積極的な推進までは行っておりません。

○西本ちかこ 令和4年度は本市のお米の買取り価格を上げられたということで、小学校給食の米飯の約85%が茨木産で賄われ、不足の15%が化学合成農薬や化学肥

料の使用量について通常の半分以下で栽培される特別栽培米ということが分かり、本市としては同じく通常の半分以下の使用量で栽培される大阪エコ農産物や環境に優しいレンゲ米栽培については普及推進を行われていますが、有機農業については積極的な推進までは行っていないということが分かりました。

豊岡市の人口は、本市の28万人に対し約8万人です。

水稲の作付面積が2,910ヘクタール、収穫量は1万4,300トンということですが、本市の農地面積、お米の作付量、収穫量、また、市内市場売買量についてお聞かせください。

本市で生産されているお米を作られている農家の方に、農薬や化学肥料を使わない方向へと少しずつでも進めていただくことはできないでしょうか。賛同いただき、農家の方に取組に挑戦いただくことはできないか見解をお聞かせください。お願いします。

○松本産業環境部長 本市の農地面積、お米の作付量につきまして、令和3年産米に関して農林水産統計年報によりお答えいたします。

市内農地のうち、水田面積は505ヘクタールでお米の作付面積は331ヘクタール、米の収穫量は1,620トンとなっております。

市内農家の米の販売先や販売量等全ては把握できておりませんが、令和3年産米の買取り数量といたしまして、JA茨木市が210.6トン、見山の郷が約25.4トンと聞いております。

有機農業へ移行する可能性についてでございますが、市内農家は小規模な農家が多く、自家消費用を除いた余剰米がJA茨木市等に販売されている傾向がありますことから、必要最低限の農薬使用にとどめられる一方で、減収リスクが高い無農薬栽培は労力的にも厳しいこともあり、敬遠される傾向が高く、難しいというふうに考えております。

○西本ちかこ ご答弁ありがとうございます。

豊岡市と比べると本市の人口は3倍以上です。

5歳から14歳の人口も約3倍でした。水田面積、作付面積、米の収穫量ともに豊岡市は約10倍ですので、豊岡市のような生産量は本当に難しいことかもしれません。また、マンパワーも必要です。豊岡市のコウノトリを育む農法は最初数軒の農家から始まり、若手生産者や無農薬栽培を目指してIターンした生産者にまで広がったと聞いております。豊岡市有機農業実施計画策定委員会の会議録の中でも、課題は多くあることも書かれていました。しかしながら、雑草対策、作業全体の手間や冬季の水管理など、課題に対してサポートを行い、販売価格の差額については、年間1,000万円程度でしたが助成を行ってこられました。

最後にお聞きいたします。

豊岡市では学校給食に月に一度、8日を有機野菜の日として地元の有機野菜を給食に使用し、形が整っていない有機野菜を並べ、子供たちが触れることもでき、よい試みだと思いましたが、本市において有機野菜の日を設定し、小中学校の給食に反映させるなど、オーガニックの取組を進める予定はありますでしょうか。有機農業の推進が難しいとのご答弁をいただきましたが、茨木市の小中学校のお米からまずは減農薬、化学肥料を減らすことから始めていただきたいと思いますが、お聞かせください。

○小田教育総務部長 オーガニックの取組についてでございますが、現在も食材の一部に有機栽培や特別栽培のものを使用しておりますが、給食の食材費は保護者負担が基本となっており、有機栽培等の農産物は量の確保だけでなく、価格においても課題があることから、導入につきましては慎重な検討が必要であると考えております。

減農薬に対する見解についてでございますが、特別栽培等の米が増えることは望ましいことと考えており、現段階でも一部、納入をしておりますが、一定の基準を満たしている茨木産の米を使用し、地産地消を推進することも重要であると考えております。

○西本ちかこ 本当に課題がたくさんあって難しいんだなということが分かりましたけれども、国では出生数が80万人を切り、ますます少子化が進んでおり、国の少子化対策、農業政策の転換を待ってばかりはられないと思います。

食の安全が子供たちのアレルギーや発達への課題、また不妊の原因にもつながっているとも考えられると思います。私たちの住むまちの自然は安全か、次の世代に何を伝えるか、農、食の安全は子供たちの食育、生物多様性の保全や生きる力を育む教育にもつながると思います。

地産地消のお米をできるだけ減農薬、化学肥料の使用を減らしていただくと、さらなる必要な支援と取組を要望させていただきまして、私からの質問を終わらせていただきます。ありがとうございました。